

人口流出にストップ!

若い女性が 県外流出する理由

～やっぱり これが大きかった!!～

若い女性の県外流出が止まりません。なぜ若い男性より女性の方が流出してしまうのでしょうか。青森県男女共同参画センターが行った「女性の県外流出に関する調査」から見えてきた実態をお伝えします。

選ばれる青森県へのヒントを探る

転出のタイミングは進学・就職時

県外へ転出した理由については、進学・就職のためが圧倒的に多く、その理由としては県外に働きたい職場や学びたい学校があったというものがダントツでした。

女性の県外流出は

経済的魅力から?

なぜ県外に出る女性が多いと思うとの問いには、「経済的魅力に乏しい」が最も多く、次に「閉鎖的な社会」や「古くからの慣習やしきたりに縛られたくない」が続きました。厚生労働省の「令和4年賃金構造基本統計調査」によると、本県の女性の所定内給与額は、男性の81・9%でした。更に全国の女性の所定内給与額平均の84・6%で約4万円低いという現実があります。

女性の貧困が問題とされる中、本県においては一層厳しい現実が女性を取

り巻いていることが浮き彫りになりました。

青森県教育政策課の令和4年5月現在の「高等学校等卒業者の進路選択」によると、本県女子の進学率は54・4%でした。女性にとって大学等への進学が特別なことではなくなっている現在、学んだ知識やスキルを活かしながら自分らしく生きていきたいと思うのは当然のことのように思われます。本県には、そのような女性の望む仕事や職場が少ないことが大きな要因の一つとなっています。

調査の中でも「一次産業の会社が多く、それ以外だと介護か医療しかなく、女性が活躍できる就職先がない」という声も寄せられました。また、「就職したいと思える就職先があるかもしれないのに探せない」「就職先を知る機会があれば地元に戻りたいという気持ちが強くなると考えられる」という声もありました。

地元企業が、本人やその親に知られる機会がないまま、就職活動の際の選

青森で暮らす課題は雇用機会の不足

青森で暮らす課題については、「雇用の不足」が最も多く、「まちの過疎化」や「高齢化の加速」に加え、「娯楽施設の不足」もあげられました。

女性の県内定着のカギは固定的性別役割分担意識からの脱却!

られたのは「地元に戻りたかったから」でした。その理由の多くは、親族がいることで、青森で暮らす一番の魅力も同様でした。自然の豊かさや慣れた風土であることも後押しになったようです。一方、「二度県外に出たことで青森県の魅力を知ることができてよかった」という声も多く、「二度出てみて、いつでも戻っておいで」というスタンスも大事なことと思われれます。

本調査の結果、将来に渡って持続可能な地域づくりのために、私たち一人ひとりが無意識の偏見に気づき、固定的性別役割分担意識を改めていくことが、女性の県外流出に歯止めをかけることに繋がるのではないかとということが浮かび上がってきました。一人ひとりの多様性を尊重し、自分らしくイキイキと生きること応援するような地域社会が望まれています。

転入のカギは親族との関係

転入理由として「就職」の次にあげ

閉鎖的な社会・古くからの慣習やしきたりに対する拒否感

次に課題としてあがっていた「閉鎖的な社会」や「古くからの慣習やしきたり」については、「男尊女卑が根深い。江戸時代かと思うことがある」「職場や地域の体制や感覚が古いまま」「社会全体が保守的で、変化や新しい価値観や多様性を受け入れづらい面がある」

「女性の社会進出、キャリアアップに対する会社の意識の低さ」「自分より年も能力も下の男性の昇進を見続けるのはつらい」など、固定的な性別役割分担意識や無意識の偏見(アンコンシャス・バイアス)による生きづらさを訴える切実な内容が多くありました。

固定的性別役割分担意識

「女(男)だから～」
「女(男)のくせに～」



作成：青森県男女共同参画センター

無意識の偏見 (アンコンシャス・バイアス)

「女(男)だから ～するべき」
「女(男)だから ～すべきでない」



固定的性別役割分担意識 とは

「男は仕事、女は家庭」とか、「男は主、女は従」などに表されるように、性別によって適した役割や能力、活動する分野があり、それを分担し合うのが自然だとする固定観念をいい、その時代や地域の慣行、法制度など社会構造とも密接に結びついています。近年では「男は仕事、女は家庭も仕事」という「新たな性別役割分担」の問題も生じてきています。

無意識の偏見 (アンコンシャス・バイアス) とは

「自分自身が気づかずにもつ偏った見方や考え方」のこと。

対象：青森県にUターンした20代～30代女性
回答数：292人
調査期間：令和5年2月1日～2月28日
※詳細は当センターホームページから



地域への愛着どう育む？

伊奈かっぺいさんに聞く

津軽弁が教えてくれた

「あなたの宝物ば探して」

解説不能なほどの方言で繰り出される詩や短歌の世界に、笑って、笑って、時にはホロリ。タレント伊奈かっぺいさんが代表を務めるイベント「津軽弁の日」を知らない県民は少ないのでは？バラエティに富んだ出演者たちが語り演じてみせる詩や短歌などの一般公募作品は、どれも青森での生活や思い出を津軽弁で生き生きと描写したものばかりです。女性や若者が県外へと流出し、人口減少が止まらない本県の現状。青森の暮らしの中から生まれた言葉を35年に渡り受け止めてきたかっぺいさんは、どう感じているのでしょうか。

作品を一般公募

「津軽弁の日」は1988年10月23日、青森市文化会館（現・リンクステーションホール青森）で幕を開けました。大ホールではなく、4階会議室。観客数は300人でした。作品公募がスタートしたのは第3回目の1990年から。詩、俳句、短歌、川柳、体験記の5部門に、初めは394通の応募がありました。一般から、それも方言の作品を募ることは当時、挑戦的だったといひ「一般の、普通の人たちが方言詩なんか書けるもんかなと最初は半信半疑だったの。でも蓋を開けてみたら、非常によくできていて面白いものがたくさん集まった。こっちはちよつと自信を無くしたよ」とかっぺいさんは苦笑いで語りました。

特別感が愛着に

「地元を出そびれて、結局ずっと青森さ居るんだよ」。

これまでに青森県を出て生活する選択肢は考えなかったのかと言う問いに、冗談めかして答えるかっぺいさん。就職や進学、都会への憧れ、厳しい冬……。青森を出ていく人たちの気持ちもわかるとした上で、自身のライフワークである津軽弁への思いを語りました。「ずっと昔、津軽弁と鹿兒島弁は日本でも1・2を争うほど難解だと聞いた。それが凄く嬉しがったの。青森に生まれ育った我々は、そんな難しい言葉を何も勉強することなく理解できるんだから。生まれながらに宝物もらった気分だったよ」。唯一無二の方言を通じて地元が特別であると感じ、それがそのまま愛着になつていったそうです。「雪降つて降つて辛くて、春さなればこつたどご出で行つてやると思うんだけど。桜咲けばなんぼ良いばつて見でらつきゃ、いつの間にかねぶた来る。そうしてればいつの間にか紅葉が綺麗さなつて、なんだかんだとまだ雪降つて

まる」。青森での暮らしをいつもの軽妙な語り口でそう表現したかっぺいさんは「私も津軽弁と出会ったけど、他にも青森にしかないものいっぱいある。あなたの宝物ば探してみれば良いんでねがな」と締めくくりました。

（取材・石岡沙野）

「津軽弁の日」作品例

かがぁ わめぐ したぼって 秋の空（俳句・1990年）
 おどよりも おがさたずまる 震度四（川柳・1993年）
 かんぷけでねがさ ぼさまさ かへでみる（川柳・1994年）
 地震きたきゃ 仏間さ走った おいのかが 位牌持だねで
 ぎりっと 銭んこ（短歌・2008年）
 iPad バサマヤ舐めって ちょさねでけ（川柳・2011年）